

# 続・ 珈琲の思い出十三

「佑樹くんのお父さん、こんにちは。一体どうなさったんですか??」  
自動ドアの向こうで、膝に手をつけて、息を整えている和樹に向かって私は尋ねた。  
最近、気がついたら彼のことばかり考えているので、ついに幻覚が見え始めたのかと思っ  
たのだ。

「あ！優子さん、ハアハア、ど、どうも。あのですね、ハアハア、け、今朝、優子さんが新聞に載っ  
ていらつしやるのを見て、び、びつくりしてですね。あの、お伝えしなくては、と思っ  
て、ここまで来たんです。」

「まあ！わざわざありがとうございます！とっても嬉しいです！」

私は、和樹が私の載っている新聞記事に気づいてくれたこと、それをわざわざ言うため  
にここまで来てくれたという事実嬉しさのあまり、このまま自分の心臓が止まってしまっ  
てもいい、とさえ思っただけだった。

「今日はもうお仕事は終わりなんですか？」

私が訊ねると、和樹は

「は、はい、もう終わらせました。え、えーと、優子さんは何時までなんですか？」

私は腕時計に目をやりながら、

「私も18時までなので、そろそろ上がろうかな、と思っ  
ているのですが・・・」

その瞬間、私たちの目がまともに合って、同時に口を開いた。

「じゃあ、もし良かったら・・・」

「それでは、あの良かったら・・・」

「あ、ごめんなさい、あ、あの、お先にどうぞ。」

「じゃあ、もし良かったらこの後一緒にお食事にも行きませんか？」

和樹からそう聞かれて、行きたい！ものすごく行きたい！

でも、今夜は子供たちを預ける手はずも整えていないし、急には無理である。でも、すこ  
く行きたい！こんなチャンスはもう二度とないかも知れない。

「ああ、ごめんなさい！今日はちょっと都合が悪くて・・・、あ、でも少しだけなら。」  
すると、和樹が勢いこんでさらに尋ねてきた。

「それならお茶でもいかがですか？」

「は、はい！！ぜひお願いします。」私は満面の笑みを浮かべてそう答えた。(続く)